

地域住民から福祉、教育関係者等への無理難題要求を、 どう読み解き、対応するか——イチャモン研究の到達点——

大阪大学教授 小野田正利

※私の原稿は、次の3つをそのままつなげたものとなります。福祉だけに焦点をあてることは、現在の段階ではできておりませんので、この点をご容赦ください。

- ①「社会全体のクールダウンを！」日本学校メンタルヘルス学会第11回大会・メインシンポジウム報告（2008年1月27日、中部学院大学・各務原市）
- ②「多様化する要求と保護者の“思い”に向き合うコミュニケーション術」明石書店『育ちと臨床』第4号 特集1「対応のバリエーション」2008年4月発刊予定（このため取り扱い注意）
- ③「子どものために手をつなぐ学校へのイチャモンのウラにあるもの」日本学校メンタルヘルス学会第11回大会・記念講演Ⅱ（2008年1月27日、中部学院（中部学院大学・各務原市）

※この報告とは別に、新たに作成した「子どものために手をつなぐ3～学校へのイチャモン（無理難題要求）のウラにあるもの」（緑版）（学校讃歌ブックレット・プチ2008）を当日配布します。

①社会全体のクールダウンを！

1. メルトダウンする社会

昨年夏に「日経メディカル」という雑誌の記者からインタビューを受けました。私の『悲鳴をあげる学校～親の“イチャモン”から“結びあい”へ』（旬報社、2006年）と、小松秀樹『医療崩壊～「立ち去り型サボタージュ」とは何か』（朝日新聞社、2006年）の中で指摘している日本の社会状況への分析が「教育と医療という別の世界の話であるが、まったく同じような警鐘を鳴らしている。ついては二人の対談の機会を作りたい」という依頼でした。ただ私も余裕や時間がなく、小松先生も虎ノ門病院・泌尿器科部長としての仕事と講演などで多忙であられるため、いまだにそれは実現できていない。

小松先生は「現在、日本の医療機関は二つの強い圧力にさらされている。医療費抑制と安全要求である。この二つの相矛盾する圧力のために、労働環境が悪化し、医師が病院から離れ始めた。現状は極めて深刻である。医療機関の外から思われているより、はるかに危機的である」と述べています。

私自身も、教育学者として学校の実情を見つめ「教育改革病」と称すべき無節操で場当たりの教育政策の押しつけの実態と、他方で教育の「商品化」意識の中で、過剰なまでの要求にさらされ、学校現場が活力をなくし、真面目で良心的な教師が倒れていく、あるいは「教師を降りる」状況が進みつつあることに相当な危機感を持ち、「イチャモン研究」と称して、この事実に関わり込むことを続けてきました。

2. 「突っ込み」と「過剰防衛」

「運動会ではうるさいからマイクを使うな」「子どもが取り合ってケンカになるなら、そんなオモチャは園に置くな」「親同士の仲が悪いから、子どもを同じクラスにするな」。保護者が学校に対して様々な要求を出すことは正しいのです。しかし時として「学校にもどうにもできない要求」がイチャモンともいえるものです。そしてそれが、ここ10年ぐらいの間に、大都市部はおろか農山村部を抱える地方においても急増しています。

度重なる「突っ込み」を受ければ、学校側は受け身だけでなく、「自信喪失」に陥ります。突っ込まれた時に「説明できるように」ありとあらゆることを記録し、トラブルになるかどうか、常に行動基準となり、時には「過剰防衛」の策すら講ずるようになることも希ではありません。教師は保護者からのほんの一言にも「身構える」姿勢をとり、はつらつさが消えていきます。かくして学校は、子ども達にとっても、楽しさを実感できる場ではなくなりつつあることを心配します。

しかしこのような実態は、学校はおろか、先の医療の分野だけでなく、ありとあらゆる領域で広がりつつあるのではないのでしょうか。福祉でも一般の商業活動においても、人と人が関わり合うすべての場面で。他に対する攻撃性が、なぜ急速にわき上がるのでしょうか。私たちのイラダチの源はどこにあり、そしてその矛先はどこに向かっているのでしょうか。それは結局のところ、ブーメランのように自らに回り、良質で満足のできる教育を提供することさえつづいていくことにならないのでしょうか。

3. 互いのことを分かり合う

至る所で「いきり立つ」状況が進んでいます。医療関係者は、医学や看護がどういうものか理解しないまま判決を下す裁判官に怒っている。学校関係者は、好き勝手な報道をするマスコミ関係者に強烈な不信感を持っています。豊富な情報が得られ、通信手段も発達したのに、お互いがお互いのことを分かりあえていません。

マスコミ関係者も、販売数・視聴率という数字に追われ、真っ黒になって仕事をしています。テレビ局は番組づくりのほとんどを制作会社の下請けに出し、低賃金と長時間労働で急ぎ立てています。学校や教師のあら探しをすることが「面白い」番組づくりとして、何かネタはないかと探し、学校側は「説明責任」という恐怖にさらされ、同時に頑なに身構えて孤塁を守る。双方ともが弱者であるのに、それが連帯へと結びつかないのです。

強い者が弱い者を叩いています。弱い者は強い者に抵抗できないために、さらに弱い者を叩く。その状況を見て、強い者がほくそ笑んでいます。それはファシズム前夜ではありませんか。暴走する機関車のようになっていませんか。誰がそれを止めるのでしょうか。

もう少し冷静になりませんか。落ち着こうではありませんか。いま何が起きていて、それはどこに向かおうとしているのでしょうか。私は社会病理・社会問題として、これらの現象の裾野を見ているつもりです。

②多様化する要求と保護者の“思い”に向き合うコミュニケーション術

1. 「三つ巴」の現状

ある私立学校の研修会の記録冊子から引用を始めようと思います。

《次いで初等学校からは、従来の方針である『三位一体』が揺らぎ『三つ巴』の関係一すなわち、教師は児童を叱り、児童は保護者に不満を漏らし、保護者は教師に苦情を漏らすという関係一に移りつつあるのではないかとという観点から報告がなされた。

「従来の『この先は言わなくても分かってくれる』という暗黙の了解事項が通じなくなり、保護者に対して事細かに注意しなければならなくなった（その証拠にお知らせプリントの注意事項が年々増えてきた）。我が子が叱られるとそれを自分への非難と勘違いする保護者、怪我や喧嘩の際に担任の処置をめぐって苦情を漏らす保護者や、被害者意識と正当防衛に基づいて対立しあう保護者同士が目立ってきた」とのこと。

また「本来学校はいろいろなトラブルが生じる空間であり、そのトラブルを自力で解決してこそ、児童は成長する。その機会を、保護者が介入することによって奪っているようにも感じられる」とのこと。

「同世代の親が増えたことで、古株の親が発言の機会を失ってしまったこと、教師と親の『常識』が異なるようになってしまったこと、我が子を叱れない親が増えてきたこと等が関係しているのかもしれないが、教師と親が互いの常識を細かくすり合わせていかないと健全な子供の教育ができなくなってしまっているのではないかと。その際、不本意ながら保護者に対しても指導すべきところはするということが必要になってきたのではないかと」という危惧も示された。」

学校現場の、いまの戸惑いの状況がよく示されている報告です。子ども同士のいさかいは、子どもが同世代の仲間の中で確認しあう成長の証であり、同時に大人に「分かってほしい、気づいてほしい」というようなサインやSOSのようなものです。しかし「孤立する子育て」が進む中で「失敗のできない教育やしつけ」という強迫観念が、時として保護者の中に広がり、家庭だけでなく学校で子どもがどのように息づいているかを見ようとせず、マイナスの出来事があれば「誰の責任か」を追及する傾向が進みつつあります。こういった中で、教師と保護者の関係がトゲトゲしいものになり、肝心の「自立と自信を獲得すべき子どもの存在」が置き去りにされていくことも往々にしておこります。

2. 「ウチの子はこけません」

高級住宅地とまではいいませんが、一戸建ての中流家庭の多い地域にある公立小学校でこんなこともありました。運動場を走っていた子どもが転んで、額にちょっとした擦り傷をつくりました。よくある光景です。ただ、今の時代は保健室で手当てをするだけでは足りず、どこでなぜケガをしたのかを親に連絡をすることが常になっています。それは親が知りたいという願望があるだけでなく、連絡がなかったことだけでトラブルに発展していくことも稀ではないからです。電話に出られた母親はいきなり「う

ちの子はこけません！ こけるように育ててはいません。誰かに押されたのではないですか？」と。これには養護教諭もビックリで、二の句が告げない状態になったといいます。

とんでもない応答のように思いますが、背景には「閉塞する子育て」があると思います。単に少子化ということだけでなく、他との関係の中で「わが子をどう育てるか」が難しくなっていることです。父親は「子どもの世話はお前（母親）に任せたら、間違いがないように」とプレッシャーをかけます。母親は失敗のないように、細心の注意を払います。擦り傷を作ったこと自体さえも「落ち度」として受け止める傾向がでてきますから、「責任はどこにあるのか」を問いただす姿勢が強くなります。

親の前で振舞う子どもの姿は、一面でしかありません。他の場面で、つまり同世代の子どもたちが集う学校のような場所で見せる姿も、また子どもの本当の姿です。子どもを多面的に見るチャンスが、いま急速に失われていますから、親は学校でのわが子の姿が分かりにくいし、学校側も家庭でその子がどのように振舞っているかが見えない部分があります。家で極めて品行方正でも、ストレスのあまり学校では相当にやんちゃをする子であったり、学校ではクラス全員が友達のような明るくひょうきんな子が、家庭では「友達がいるのかしら」と思えるようなおとなしい子だったりすることもあります。

だからこそ、学校と家庭の両方で見せる子どもの姿を確認しあうことが必要なわけです。その機会が失われつつあることから、行き違いが生まれ、やがて壁となり、学校と親が“対立”していくようになることもあります。学校は、無節操で場当たり的な「教育改革」への対応で、体力（子どもと向き合う時間）と体温（思いを受け止める感受性）を奪われています。保護者も、他の同世代の親だけではなく、善意の関係にある近所のおっちゃんやおばちゃんとの関係が希薄になる中で、「子どもの様々な行動」をめぐって、また「わが子を守ろう」として、他者との関係でトゲトゲしい物言いになることもあります。

3. 「情報の共有」と「押し量る」こと

私のところには5年ほど前から、学校と保護者の関係づくりの難しさに関して、何とか打開の道はないものであろうかと、講演や研修会の依頼が殺到しています。1年間の依頼は600件（これがもはや異常）に達しますが、大学の公務や講義はもちろん、先約があっても実際にできるのは100件強ぐらいです。1年以上先の予定が打診されることも珍しくありません。当初は学校関係者が中心でしたが、PTAや地域の諸団体から依頼が増えてきたのは3年前からです。これは私自身が狙っていた当初からの思いでした。学校関係者だけが、仲間内で議論しても、いやな言い方ですが“傷の舐めあい”にしかならない場合があるからです。最も大事なことは、教職員と保護者のお互いが「いまどういう状況にあるのかを分かり合う」という情報の共有があって、学校のできることは“子どもの成長＝自立と自信の獲得”であることを認識する以外にないということです。

いきり立つ状況は、いま社会のいたるところで起きています。教師と親、医療関係者と患者、福祉施設職員と利用者など。お互いが弱者である場合が多いのに、分かり合えず「他を一方的に指弾する」状況を、まずはクールダウンする必要性があります。しかしそれをした上でも、なおもサービス提供者側が反省し、「対応力を高める」必要性もまたあるのです。私は教育学者ですから学校という場を中心にしていますが、閉鎖性や不必要な権威主義を色濃くもっていることが問題ではないか、というトラブルのケースに遭遇することも多くあります。学校側のどういう言い方に保護者はむかつくのか、いかなる態度に腹を立てるのが分かれば、不必要な摩擦や対立へと向かわなかったのではないかと。

このために3年前から積極的に進めてきたのが「ロールプレイング」というワークショップです。事例によって変化させますが5人前後を一グループとして、「保護者役」「教師役」「記録役」などに分けながら、8分間ほどそれぞれの役割（ロール）を演じてもらい、その後に「記録係」を司会者として反省会をもちます。すると必ず、わずかの時間でも保護者役がエスカレートしたり、学校側が立ち往生したりします。互いの立場を変えてみることによって、はじめて見えるものがあるのです。保護者はなぜそのことを“要求”するのか、思いのウラ（本音）にあるものは何か、それでも学校として譲歩できない部分はなにか、を考えてみようということです。「教師は理屈で説明し、保護者は思いで要求する」というズレを“子どもを中心に置く”ということで冷静さを取り戻すという取り組みです。

4. ワークショップの演出がポイント

時間の長さによってバージョンを変化させるのですが、①アイスブレイクをしながら班分け、②ワークショップの進め方の説明、③役割（ロール）分け、④扱う事例の提示と、役割をする者同士の打ち合わせ（特に保護者役は複数なので、どうやって学校側に要求を突きつけるかの作戦タイムは重要なポイントとなります）、⑤ロールプレイ本番（10分以内）、⑥記録係を司会者として班ごとでの反省会、⑦数班を指名発表し全体での振り返り、⑧考慮すべきポイントの提示、がほぼ一連の流れとなります。一

つの流れは40分もあれば十分です。

一般的にロールプレイは、照れや恥ずかしさ、なんで今更そんなことを、という覚めた感覚を持たれる方もありますから、①と②では雰囲気盛り上げ方に注意を払います。さらに幾つかの演出も工夫しています。それぞれの役割を示す名札（例、母・父・校長・担任など）を用意し、「じゃんけんでもくじ引きでも何でもいから選びましょう」と誘うと、誰もが「保護者札」（担任は責められるから嫌だ）をとろうとして盛り上がりはじめます。事例も、それぞれの役割（ミッション）を別々の色封筒に入れて渡します。保護者役はホットになるからピンク封筒、学校は青ざめるからブルー、記録係はどっちつかずのグレー封筒、という演出もかなりの効果があります。

どの学校種でも汎用性があるのが、卒業アルバムの事例です。保護者の役割を記した紙には「今日は卒業式。あなたの息子のタロウ君が卒業アルバムを持って帰ってきました。ところがタロウ君の写っている写真は、集合写真を除けばたった1枚しか見あたりません。しかも遠くの方にごく小さく写っているだけです。それなのに近所に住む同級生のマサトシ君は、大きく写ったスナップ写真が5枚も載っています。気持ちの収まらないあなたは、担任にひとこと言うために学校へ出かけていきました」と指示してあります。他方で学校側（担任、校長など）には、卒業式の後に保護者が面談要求をするという連絡があった、ということ程度しか書いてありません。記録係の文書には、やりとりの経過や気づいた点を簡単にメモしておいてください、と伝えてあります。

5. 「だんだんムカつくのがわかります」

私の合図で進行していきますが、8分程度のロールプレイでも、4分も経てばヒートアップしていきます。それは④の打ち合わせをしていることも関係しますが、親（役）は我が子のことで必死であり、学校側は「『アルバムを作り直せ』と言われても、どうしようもないじゃないか」という思いと、それでも親の剣幕を含めて、写真の枚数のチェックがなかったことは学校側の落ち度として反省しなければいけない、というジレンマに陥ります。

保護者と教員の混じっている集会でそれをする、保護者役（実際は教員）は「どうして思いを分かってくれないのかと、だんだん腹が立ってきました」と感想を述べ、一方で担任役（実際はお母さん）は「私も親ですから、親御さんの言っておられることは正当だし、よく分かります。でも学校側とすれば何とも答えようがないし、本当に困りました」と反省会で語り始めました。このアルバムの作り方に5枚と1枚というミスがあったことは事実ですが、今更作り直しはできません。ではなぜ親は、そのことでわざわざ学校まで足を運ぶのでしょうか。アルバムの写真の枚数に「我が子がこの学校でどういう扱いを受けていたかが示されているんじゃないか」という不満があり、作り直しは無茶な要求であることは分かっているが、それでも「うちの子は学校でどんなだったのか？ 友達と仲良くやっていたのだろうか？」といった「子育ての不安」があることを見て取れば、学校側の返答の仕方は違ってくるのでしょうか。

6. 振り上げた拳ではなくその源を見る

こういったロールプレイによる自身の言動や対応の仕方の振り返りは、意外に効果をもたらしています。教師に限らず、人は一般的に自分のポジション（立場）を基準にしてモノゴトを考える傾向が強いのです。それは決して悪いことではありませんが、他者との交渉や話し合いの場面では、それが強く出すぎると不必要な摩擦を引き起こしてしまうことが往々にしてあります。同じ状況でも人はまるっきりモノの見方や捉え方（認知）は違い、誰もが一定のくせ（認知のゆがみ）をもっています。ロールプレイを通してそれに気づくという意味があるのです。

先のアルバムのことでみれば、親にとってみれば我が子が一番で、かわいいに決まっています。アルバムを作り直させることは出来ないと分かっているにしても、言葉としては先鋭化する場合があります。他方で学校側はうろたえるか、一方的に謝罪の言葉だけを繰り返すか（これで親は「で、結局どうするんだ」と更に腹を立てることになります）、そんなこと今更言われても、木で鼻をくくったような態度を見せる場合もあります。

振り上げられた拳（言葉としての要求）ばかり見ていては、本質（ホンネ）を見誤るおそれがありますし、実際、アルバムを作り直した（金銭面での問題ではなく）結果、「どこの誰が作り直しの差し金を入れたのか」が問題となり、学校ではなく、要求をした親が窮地に陥ることもあります。親の要求は、オモテに見えるものがすべてではありません。拳の源がどこにあるかをたどることも必要なわけですね。

もう一つの効果は、教職員の間に連帯的な気持ちが生まれるということです。ベテラン教員が、若い教員に「あそこはこう返答したいぞ」と反省会でアドバイスをし始めるのです。もちろん私が「共同性の発揮」を大事にすること、学校の会議室（親との面談）で何が起きているか「見殺しにするな！」

と言っていることもあります。それが自然と出てくるようになります。

奇妙キテツな私の講演を組み合わせていることも関係しますが、ロールプレイを通して、それぞれの立場が分かり始めます。もちろん、ワークショップは一時的な効果しかもたらさないものです。仮定としてだから出来るわけであって、実際の場面では縮み上がってしまうことは当然あるわけです。それでもこのロールプレイの意義は、慌てずに親の“要求”をいったんは受け止める（受け入れることとは違います）気持ちや姿勢を培う上で一定の有効性を持っていると確信しています。

ただ付言すれば、それでもなんともならないケースも、稀にはあります。極めて難しい背景を抱えていたり、不当や違法な要求としか思われぬ言動を繰り返したりする場合があります。こういった場合は、距離を置いたり向き合う角度を変えたりするなどの別の対応の仕方が必要になりますが、それは別の機会に譲らざるをえません。

③子どものために手をつなぐ一学校へのイチャモンのウラにあるもの

1. 「教師を喜びとする」から「教師を降りる」

20 数年前に長崎大学に勤めていた頃、退職された校長先生の何人かから話を聞く機会がありました。1980 年代半ばの当時は、全国にやや遅れて、長崎でも多くの中学校で校内暴力や非行などの問題が深刻化していました。その渦中であって、ようやく定年退職を迎えられた方が「教員でなくなった日から、中学生を見る気持ちが変わったように思います。彼らも、本当は子どもらしいところがあるんですね」とつぶやくように言われたことが印象的でした。現職の時には“取り締まりの対象”としてしか見えなかった中学生が、立場を変えてみると“ごく普通の思春期に悩む青年”として映るということでした。

しかし今、定年を迎えずに「教師を降りる」人が増え続けています。しかし、そこにはかつての校内暴力を中心とした生徒指導上の悩みや苦悩（生徒対応）ではなく、保護者との関係づくりの厳しさ（保護者対応）が暗い影をおとし、同時に教員評価という同僚性文化を破壊する政策が導入される中で、「もうやってられない」と決意するようになっていきます。有望な若い教師が、OJTとして同僚の中で少しずつ成長する文化が急速に薄れる中で、教科指導とは別に、部活や生徒指導の場面でトラブルを抱え、他方で指導力もあって有能なベテラン教師が、あえて“火中の栗を拾う”ようにしんどいクラスを受け持つ中で、子どもとの関係ではなく、保護者との抜き差しならない関係づくりに神経をすり減らしています。そして時には、心の病にかかり、不幸なことに自死されることも増えています。

2. 教師の辞め方と学校観・社会観

こういった実態に“注目”したテレビ局の 30 数社が、私の所にやってきて、インタビューに答えてくれる関係者を紹介してくれと迫ることが多くあります。私の進めてきた研究に賛同して多くの情報をくれた教員や校長でも、画面に顔を写すことはもちろんのこと、この要望に応じてくれる人を探すのは本当に難しくなりました。NHKの「クローズアップ現代」のような番組でさえ、民放各局と同じように抵抗感があります。退職校長でもそれは同じですが、その出演交渉を私がしていて、気が付いたことがあります。それは、校長（教員）を辞める時の「辞め方」や「背景」によって、その後の人生観も世界観も変わってしまっているのではないかとということです。

在職中に、それはしんどい保護者との対応で苦労された校長がおられました。もう 3 年以上前に、私の存在に注目し、真っ先に校内研の講師を依頼してこられた方です。私は半年間に、その学校に二度も研修会講師として立ち会い、個別の対応のアドバイスをしました。その校長は、定年退職が決まっている後の、次年度の計画も立てながら、積極的に取り組んでおられました。しかし私が出演（もちろん首から下だけの映像）をお願いすると「小野田さん、悪いけど、もう自分は学校や教育のことは考えたくないんだわ。そういう世界とは無縁のところで生きていきたいから、今後は連絡をとらないでくれ」と言われました。元校長の声は沈んでいましたが、それを聞いた私は「フラッシュバックを起こさせてしまったのか、申し訳ない」という思いと同時に、「思い出すのも嫌だ」というほどの気持ちを持つことの悲しみを感じました。

「子どもとの関係だけやったら、なんぼでもする。でもな、保護者との関係はそうはいかん。苦しい思い出の方が募る」と、執拗なクレームの嵐の中で「楽になりたい」といって辞めていった先生がたくさんいます。子どもたちとの交流で楽しい経験もたくさんあったであろう教員・校長としての 30 余年が、無惨にも全否定せざるをえないような気持ちになることは、退職後の生き方やモノの見方に本当に大きな影を落としていくように感じます。冒頭で述べた、退職後の立場の変化で、子どもに対する見方

が変わったのとは対照的な姿です。

3. 悲鳴をあげる学校

「私はAさんと仲が悪いから、私の子とAさんの子は別々のクラスにして欲しい。」「同じオモチャをとりあってケンカになるぐらいなら、そんなオモチャは園に置かないで欲しい。」「ウチの子は自己紹介が苦手だから、クラスの中で自己紹介をする場面をつくらないで欲しい。どうしてもさせるというのなら休ませます。」「運動会ではマイクを使うな。」「ブラスバンドは窓を閉めて練習して欲しい。」「

いま全国の学校が、このような多様な要求に悩まされています。私は、保護者や地域から学校に寄せられる要求を三段階に分けています。「学校がやるべきことに対するまっとうな要求」が「要望」、「学校がある程度まで対応すべき要求」が「苦情」、そして「学校にもどうにでもできない要求」が「イチャモン（無理難題要求）」です。私は多くのインタビュー調査とともに、この4年間に3回のアンケート調査もおこなってきました。無理難題的要求が本当に増えてきているのかについての明確な数字は示すことはできませんが、確実に言えることは、「要望」よりも「苦情」が急増し、さらには「無理難題要求」が多くなってきたと感じる（実感値）教員が多数いるということです（グラフ参照）。

学校に対する要求が拡大し続け、学校の責任領域や守備範囲を超えることまでが求められる中で、学校側は一度もミスをするを許されない存在として理解されはじめます。受け止めきれなくなった学校側は「突っ込まれた」時に説明できるように、証拠記録を残し、ありとあらゆる防御策を張りめぐらせ、時には不必要と思われるような防御策まで講じる状況が進んでいます。「突っ込み」→「自信喪失」→「過剰防衛」の繰り返しともいえますが、本来の子どもとの触れ合いや学校教育に時間や精力を割くということよりは、トラブル対策に心砕くしんどさが最もつらい、と多くの教師は言います。

4. 体力と体温を奪われる学校

規制改革会議などの答申文書を見ればよく分かるのですが、政府の進める「構造改革」の一環として「商品としての教育」があげすけに語られています。そして学校などに、バウチャー制度や学校選択制という形で変革を迫っています。こういった風潮が喧伝されれば、学校教育は「消費する対象」としてしかみられず、満足できるような教育を「共に作り上げる当事者としての子ども・保護者」という存在は消し去られていきます。このことが、子どもを前にして対等に協力しあう関係ではなく「顧客とサービス提供者」という間違った関係性意識を生み出すことになります。したがって理不尽な要求は、必ずしも公立学校に多いというわけではなく、むしろ私立の進学校の方にも相当に厳しい現実があり、保育料を払う保育園・幼稚園も悲鳴をあげているのです。

「教育改革病」とも形容すべき矢継ぎ早で場当たりの「教育改革案」の提示とそれらへの対応の強圧的姿勢も、急速に教職員の志気をそいでいます。教員評価制度と給与査定への反映は、教師文化の中にあつた同僚性を弱め「自分にさえ降りかかってこなければ」とか「火中の栗を拾うもんじゃない」という孤立主義的傾向を強めさせ、結局は保護者からの多様な願い（要求）を受け止める保水力を失いつつあります。

「教師になんか絶対になるんじゃないぞ、と自分の子どもには言い続けている」と語る教師が急増し「こんなにも教師という職業が楽しくなくなったのはなぜでしょうか」と、食って掛かるように私に質問する人もいます。複雑化する子ども達の実態への対応、矢継ぎ早に降ってくる上からの「教育改革」への対処、能力を超えた過大な要望の前に苦悩する学校というのが今の日本全体の状況です。定年前に「教師を降りる」人は急増し、能力的にも高く真面目な青年が教職に就くことを忌避する傾向が進んでいることは危機的に思えるのです。

5. モンスターではない！

しかし、コトは学校だけに起きているものではありません。社会全体の風潮が「言ったもん勝ち」そして「言わなソン」という傾向を強めているのです。国の指導者や上層部が一方で「やりたい放題」をし、それに正当な批判を向ける目が育っていないように思います。何かコトがあれば「あいつが悪い」と国民総出で叩きまくり、過激で暴力的な言い回しをするタレントの言動に、溜飲が下がるような思いで依存しているような印象があります。しかしそれは根本的に自らの抱える問題が解消されたわけではないために、次の攻撃される標的が必要という、一種のファシズム的な兆候が感じられます。

こういった中で最近になって、マスコミなどで「モンスター・ペアレント」という言葉が出回り始めました。しかしこの言葉は、とんでもない人格否定の意味を持ち、結局は保護者と向き合う教職員の気持ちすら萎えさせていく危険な用語であると、私は批判し続けています。親と教師は敵ではありません。ごく一部に過激な言動を繰り返す方がいたとしても、それはその言動の可否を議論すべきであって、人

間性そのものを否定すれば、関係構築そのものが不可能となっていきます。

確かにいくつかのトラブルの中には“解決が難しいケース”もあります。学校側に落ち度はあるにしても、現状のシステムではなんともならないような要求に発展していくことや、教職員の市民生活を脅かすような形で要求を繰り返す、学校全体の機能がマヒしていくような行動をとる方も、ごく少数ですが確かにおられます。この場合には「距離を置く」あるいは「適切な関係性を保持する」ことが必要です。医療や福祉あるいは法律の専門家のアドバイスを受けながら、どのように「接するか」を学校全体として共通の方針とすることも大事でしょう。それは、排除とか敵視（モンスターという言い方ではそうになってしまう）ではないのです。私がイチヤモンという言葉を使っているのは、人の行為や行動について、それぞれの背景を見据えながら、共通の議論の土俵にあげることを目的としているのであり、人を否定してはいないのです。

6. イラダチ感と「親教育」の強調

このような事態が進む中で、一方では「親教育の必要性」が主張されはじめました。しかし国や行政機関が、ことさらこれに口や手を出してはいけません。文部科学省発行の『家庭教育ノート』や『家庭教育手帳』では、家族の団らんや、夕食を一家で共にする必要性がうたわれていますが、現実には、子どもの夕飯時の7時に、家路につける保護者がどれだけいるのでしょうか。行政がやるべきことは、子育てを不安なく遂行できるための条件整備が第一なのです。

大手の雑誌記者が「最近の親はなっていない！」と私に向かって親教育の必要性を力説したことがありました。彼の妻は教師で、彼自身は編集責任者の仕事に就いています。「それじゃあ、あなたは一週間のうちに、どれだけ子ども達と一緒にご飯を食べているのですか？」と聞き返しました。彼は下を向いて「一回程度ですかね……」と。雑誌編集の仕事は午後からが本番です。朝八時過ぎに起きた時には、子どもたちはすでに学校に出かけ、夜はほとんど終電車での帰宅で、子どもの寝顔しか見ることができない実態です。彼は正規社員ですが、そうでない人を含めて、朝6時台の電車で出勤する人たちの多さ、労働条件や生活条件の破壊現象が確実に広がっています。彼の発した言葉の中には“イラダチ感”が透けて見えます。それが時には、学校や保護者の現状批判へとスリカエられたりしますが、実は自分自身の置かれた状況へのストレスとムカツキでもあるように思います。

親学や親教育を、国や行政が語ってはいけません。それはまさに天に向かって唾する行為です。様々なはけ口を探してぶつけるのではなく、冷静に、なぜこのような現状が進んだのか、誰が何をする必要があるかについて、理性を取り戻し合理的な思考と行動をすることによって、ファシズム的風潮をくい止めることへとつなげていかなければならない、と強く思います。

7. 対等に語り合える時代の中で

今のようなく「対等にモノが言えるような時代状況」を大切にしたいと思います。これまで言おうと思っても言い出せなかったことを口に出し、対等に話ができるということはホンネで話し合うことができるということです。互いにイラダチと不信の構図にはまっていないだろうか。一方で学校に、不必要な権威主義と思いがかりはないだろうか。それが無意識の壁を作り出し、本来、手を結び合うことのできる存在なのに、それをいたずらにこじらせてはいないだろうか。子どもが楽しく学校に通う後ろ姿をととして、保護者は満足感と安心を感じ、教師ははつらつとして子どもの学校教育にあたることのできる環境を取り戻す必要があります。

学校や教師は、保護者などからの表面上のトゲトゲしいモノ言いの、ウラにあるホンネや理由（ワケ）を押し測ることを大事にして欲しいと思います。保護者の方にはお願いしたいことは「3回に1回は先生を誉めてやってください」ということです。それによってようやく話し合いのテーブルができ、学校は何をするところで、何ができて何ができないかを確認することへとつながります。そして何より「ストップ・ザ・教育改革」です。学校と教職員に体力と体温を取り戻すことが、実は子どものためにも社会の維持のためにも急務です。

私は、2006年度から科学研究費の交付を受け、大学研究者だけでなく弁護士・精神科医・学校現場関係者からなる「学校保護者関係研究会」を発足させました。今なお手探りの状態ですが、次の三つぐらいの領域を念頭に着地点を探しています。

一つは、日本の社会全体のクールダウンということです。いきり立つ状況は学校だけでなく社会全体に広がり、時には暴発ともいえるキレる状況が起きています。落ち着いて冷静さをどのように保つのか、社会問題・社会病理としてこの現象を共に考える気運を作れないかということです。二つ目は、学校の対応力の低さやまずさが確かにあるのです。それによってこじれていき、精神的に双方が不信の構図にはまる状況が進むことを、どうやって防ぐかということです。このために三年以上前からロールプレイ

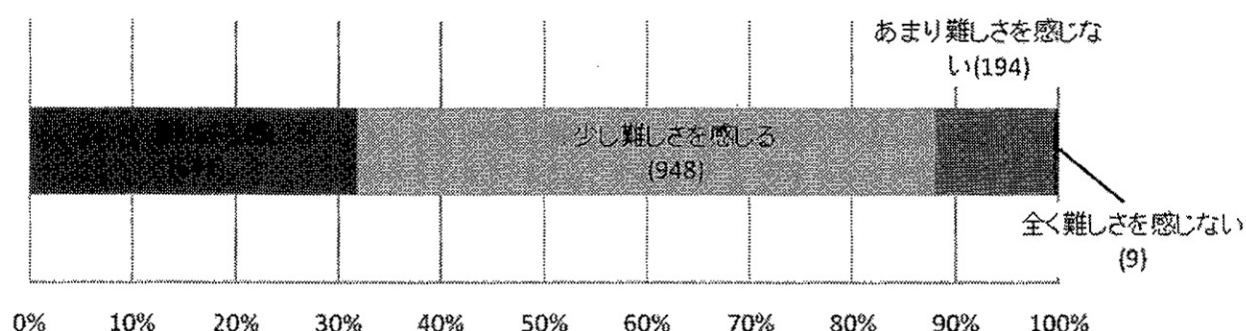
ングという形でのワークショップを精力的に進めています。そして三つ目は、社会全体が落ち着き、学校の対応力が高くなったとしても、それでも何ともならない、あるいは相当に解決が難しいケースもあります。それにどのような道筋をつけていくのか、どのような条件整備やシステムを作り出す必要があるのか、ということです。

私のイチャモン研究の目的は、追い詰められる保護者、疲弊する学校と教職員、閉塞感の漂う不寛容な社会、この状態からの脱却の可能性と方向性を探ることにあります。

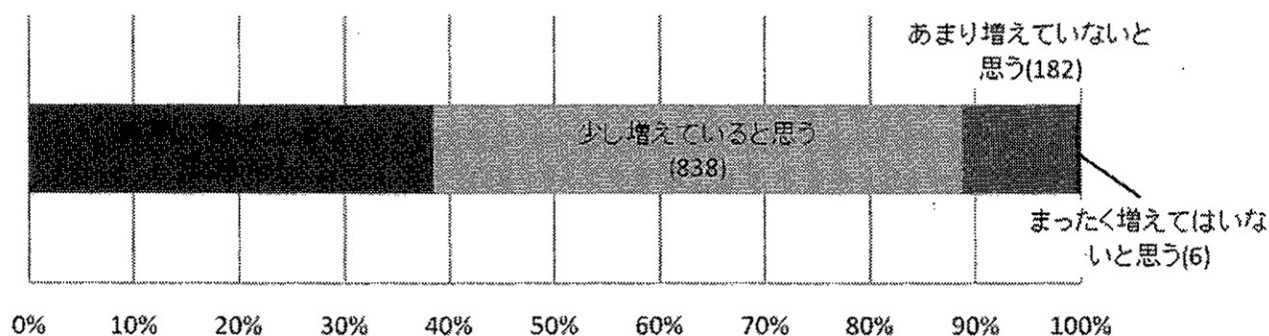
(※この文章は『教育と医学』（慶応大学出版会）2008年2月号(656号)に掲載予定の原稿を一部手直したものです)

学校と保護者の関係に関する調査(小野田正利、大阪大学人間科学研究科・教育制度学研究室2006年9月実施)関西Q政令指定都市の一般教職員(回収数:1695)

問1「保護者との関係の作り方」に常日頃難しさを感じているか (無回答: 3)



問5 無理難題的な要求は増えているか (無回答: 26)



問5SQ 無理難題的な要求はいつごろから増えてきているか (無回答: 212)

